縦走競技県チーム

成年男女V・少年男女準V！

9月30日・10月1日 森吉山特設コース

成年・少年女子の原動力は北秋田市勢

山岳競技で天皇杯第1位、皇后杯3位に輝いた秋田県チーム

本市で行われた競技のうち、森吉山特設コースが会場となった山岳・縦走競技では、秋田県チームは本市勢も大活躍し、成年男女が優勝、少年男女も準優勝という快挙を成し遂げ、天皇杯（男女総合成績）、皇后杯（女子総合成績）順位の押し上げに大きく貢献しました。

まず、成年男子で優勝

山岳競技は、山を走る「縦走」と、人工の壁を登る「クライミング」の2つの競技の総合成績で争われます。秋田県チームは、縦走競技が国体競技としては最後の大会となることもあり、成年男女、少年男女とも縦走を重視し、何度も国体コースで試走を重ねるなど成年・少年男女全種目での勝利を目指して国体本番に備えてきました。

この結果、まず9月30日に行われた成年男子では期待どおり藤田慎吾選手（秋田工高教員）が2着でゴール（42分00秒）。チームメイトの伊藤竜太選手（秋田自衛隊）も8着、総合で見事第1位。

縦走を制した藤田選手は、「タイトルを取る自身はあった。この競技は、国体では最後となったが、世界では「山岳マラソン」として広く行われているスポーツ。これからもがんばって底辺拡大に貢献したい」と述べていました。

北秋田市勢でV、準V ――成年女子・少年女子

2日目の10月1日には、成年男子の大熱戦の余韻が残る中、成年女子、少年男子・女子3種目の決勝が行われました。

この3種目は前日クライミング競技を終え、縦走の結果次第で勝敗の行方が決まることから、スタート地点やコース沿道では、各チームの監督や家族らが列をなして競技を見守っていました。

午前10時30分、成年女子15チーム30人、少年男子16チーム32人、少年女子15チーム30人、総勢92人が一斉に駆け出しました。

3種目同時スタートのため、大会役員は3色に分けられたゼッケンと番号で区別をしなくてはなりません。コース途中での通過確認地点でも、場所によっては一団で駆けつける選手の力走を前に、その区別と通過の最終報告に一時の緩みも許されない緊迫のレースとなりました。

コース終盤の海抜1040m地点は、勾配がきついゴール前最大の難関ポイント。コース脇では、各県関係者などの大きな声援が飛び交っていました。

秋田県チームは、成年女子では加賀谷絵里選手（県体協＝鷹巣高校勤務）、吉田麻衣子選手（県体協＝北秋田市教育委員会勤務）、少年女子が吉田里美選手（鷹巣高）・畠山菜都美選手（同）と北秋田市勢が出場。地元応援団の大きな声援を受けた4人は、満身の力を出し切って森吉山の中腹を駆け抜け、成年女子で優勝、少年女子が準優勝と栄冠を勝ち取りました。

また、秋田工業高校の石田健祐、進藤将両選手が出場した少年男子も準優勝し、県チームは森吉山が国体最後の競技会場となった縦走競技で記念すべき記録を残してくれました。

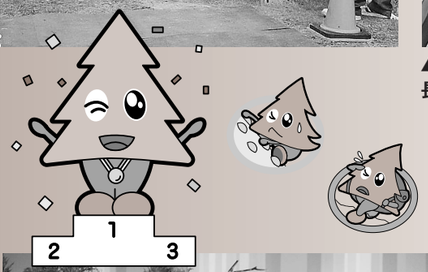
▲スタートする成年男子選手94人。17kgの重りを背負い（成年女子・少年男子は12kg、少年女子が8kg）、延長7.2km、高度差601mの過酷なコースでタイム（チーム2人の総合成績）を競います

2着でゴールする成年男子の藤田慎吾選手

ゴールする吉田麻衣子選手

▲表彰台の吉田さん（右）。皇后杯順位は山口と長崎が同点で1位。秋田・宮城が3位。

▶成年女子の吉田麻衣子選手（上）と加賀谷絵里選手（下）。2人は花輪高校時代、全国高校女子駅伝で一緒に都大路を走った仲。国体最後となったこの種目でまた一つ大きな思い出を作りました



▼少年女子には、鷹巣高校の吉田里美選手（3年）と畠山菜都美選手（2年）が出場しました。吉田さんが4着、畠山さんが10着と、2人の合計得点で第2位。（写真は吉田さん）

▲縦走競技優勝の成年男子チーム。左から柘植敏朗監督、宮田仁選手、伊藤竜太選手、藤田慎吾選手。天皇杯（男女総合成績）でも栄冠を獲得

◀ゴール会場で給水準備をする高校生ボランティア。ゴール会場へは役員、ボランティアの全員が「登山」をして通いました